

昭和39年度九州地域の気象と農作概況

気 象

(1) 暖冬と2月の寒冷

前年12月の暖冬傾向は1月いよいよ顕著となり、次の2月は平年より寒冷であつたが、12～2月の冬全体としてみればこの冬はかなり暖冬で、前に3年続いた低温多雪な冬が今冬期によつて中絶の形となつた。

1月は冬型気圧配置が弱くて崩れやすく、特に中旬前半に南の暖気が流入して異常高温が現われた。月平均気温は平年値より1.5～2.5°Cも高く、また月間降水量が大部分の處で平年値の2倍強あつたのも特徴的で、日雨量の数10mmが中下旬にしばしばあつた。従つて日照は熊本など一部を除けば一般に少なかつた。

冬型の寒風吹出しと降雪は1月には中旬後半と下旬末にあり、後者が2月始めの寒冷に続いた。2月は全般に1°C内外平年より低く、特に日最高気温が低い。これは各旬前半の寒風降雪や、北高南低気圧配置のぐずつき天気が多かつたためである。日照は当然に2月平年値より数10時間も少なく、それは九州北半域に著しい。降水日は多いが降水量は一般に数10mm少ない。

(2) 変化の多い春、とくに4月の異常高温

3月は一応順調であつたが、4月の記録的な高温と少照多雨、5月は多照少雨高温と大きく変化した。2月末から3月末まで移動性高気圧と低気圧が数日ごとに交互に通過し、時には冬型の吹出しもあつたが、平均して気温は平年並み、平年より30～50時間多照で30～50mm少雨、薩南諸島は100mm内外の少雨であつた。

3月末～4月始めに南の暖気が流入したが、4月前半はかなり多雨冷湿な天気もあつた。中旬後半から下旬前半には太平洋高気圧に支配されて夏型となり、日最高気温が28°C以上、大分など30°C以上も現われ、記録破りの高温となつた。下旬後半また雨続きの低温で、西北部九州や島には豪雨もあつた。かような4月始めと終りの冷湿を含んでも、なお4月平均気温が平年値より4～5°C強も高いことは、前記の中下旬の高温が全く異例のものであつたためである。4月は平年より100時間内外も少照、南九州の一部を除く大部分は数10～170mmも多雨という悪条件の春であつた。

5月は雨が周期的で各旬1、2回はかなり集中的な雨もあつたが、月合計雨量は少なく、平年より多照・高温な経過であつた。

4月の異常高温を中心とし、広くみれば3～5月のこのような気象の変動が農業の各種場面に及ぼした影響は甚大で、本年の注目すべき現象の一つである。

(3) 間けつ的な梅雨

6月始めに数10mm/日の雨があつた後は一般に雨が少なく、次の雨は南・西九州では中旬前半、九州全域は中旬末に数10～150mm内外の雨をみた。南九州はそれから下旬全体に降り続いたが、九州北半ではまた中休みして24～27日に数10～100mm以上の日雨量がまとまつてあつた。これで本年の梅雨は一応終つた。

この中旬末と下旬の雨はかなりの集中豪雨のため、極地的水害も発生したが、6月前半の少雨多照の後で水不足の解消に役立ち、またかような晴雨の暦目的配分は農作業の進捗には有利であつた。

6月の気温は平年並み、一部の地区が平年より少雨や少照であるが、九州の大部分は平年より雨量多く、同時にまた多照でもあり、昨38年の異常長期多量降雨とは全く異つて、農業上は良い梅雨期であつた。

(4) 高温な夏

7月は上旬末に大分県と九州西岸、中旬末近く全域に数10mmの雨があつた他は、微雨の日数はかなりありながらも各地とも連日多照で、低地全般は日最高30°C以上の気温が月の大部分の日に連続出現した。

8月も引続き太平洋高気圧が強く、高温であつた。台風11号は月始めに南・西諸島と南九州に豪雨を、台風14号は南九州に中旬後半と下旬前半に豪雨をもたらしたが、九州北半はこの台風で下旬前半に天気が崩れるまで猛暑が連続し、中旬には各地で日最高35°C内外から37°C以上も出現した。14号台風通過後は大陸高気圧におおわれたので著るしい高温は出なくなつた。すなわち本年の夏は7月当初から盛夏型炎天が続き、ごく一部を除き全域が最高・最低・平均気温とも1～2°Cも平年より高く、8月も南九州の最低気温は平年より低かつたが平均気温や最高気温は平年より1～1.5°C高い。

7月雨量は平年の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ で極端に少なく、日照は平年より数10時間多く、九州北半はこの状態が8月下旬始めまで続いて8月雨量も40～150mm平年より少なく、また多照であつた。九州南半は8月2回の台風によつて平年より少照で、はるかに多雨であつた。

要するに本夏は北九州は約2カ月近くの高温乾燥、南九州は8月は多雨ながらやはり高温な夏であった。

(5) 台風11号, 14号, 20号

本年は九州本島も数年ぶりに強烈な台風に見舞われた。8月始めの台風11号, 8月下旬前半の14号, および9月下旬半ばの台風20号である。

8月始めは太平洋高気圧が勢力強く九州をおおっていたので, 台風11号は西方海上を北上し, 九州の南・西洋上の諸島と南九州にはかなり強い風雨をもたらしたが, 本島の大部分には無影響であった。

台風14号も太平洋高気圧に押えられて北上が極めておそく, その間に南方洋上で台風16号と合して廻転するなど特異な動きをした。ために薩南諸島は長期間の強風雨にさらされ, 南九州も8月中旬後半から豪雨が始まった。8月23日深更に枕崎に上陸し, 阿久根附近で転向して熊本から別府湾に抜けた。九州北半域は風も弱く, 数10~100mmの強の雨はむしろ長期干天後の慈雨となつたが, 南九州では風雨とも強かつた。この台風は上陸前は風台風的であつたが上陸後はどちらかと云えば雨台風となり, 南九州の高原地区には1700mmを越える雨もあつて, 水害および風害が発生した。

台風20号は動きの速い, 強度の風台風であつた, 奄美が9月23日夜に暴風雨となり, 24日夕刻大隅半島に上陸し, 宮崎市附近から日向灘に出て豊後水道を進み, 25日1時に四国に再上陸した, 大隅上陸時に940mb, 大分市沖でも950mbであり, 奄美・薩南諸島から南九州の一带は平均最大風速30~50m/s, 瞬間最大風速は40~70m/sにも達し, 農作物を始め各種の強度の風害が発生した, これらの地方は雨も150~300mm, 宮崎・大分両県の山間部は300~500mmの豪雨もあつて水害も発生した。九州本島の西側半域は雨は20~30mm以下, 最大風速も10数m/sであり, この台風では九州の東側半域が被害圏となり, 島嶼を含む鹿児島が最大被害地, 次は宮崎, 3位大分県である。

これらの台風は本年大豊作の実現をはばんだ大きな災害あつた。

(6) 暖冷の変化の多い秋

高温な夏に引続き9月中旬まで残暑型, 中秋は暖冷

晴雨の周期的変化に富む経過, 晩秋11月中旬以降の低温多照がこの秋の主な特色であつた。

9月上中旬はしばしば前線によるかなりの雨もあつたが, その間には太平洋高気圧が強まり33°C内外の高温も現われ, 最低気温も高い。下旬から17°C以下の日最低気温も発現し, 台風20号以後は大陸高気圧の南下で急に冷えこんだ。しかし9月平均気温は平年値より1~1.5°C高く, 一部の地区を除けば月間日照は平年よりかなり多く, 雨量は少なかつた。

10月は上旬後半, 中旬半ば, 下旬始めに数日ずつの雨が降り, 西・南九州や島嶼に豪雨もあつた。この雨天の間は秋晴れが続き, 日最低気温は上中旬では10°C内外, 下旬には5~10°Cまで下つた(九州西岸と南九州は10~15°C)。しかし平均気温は全般に1~1.5°C平年より高い。日照は平年と大差なく, 南・南東部九州が平年より多雨ながら, 一般は少雨であつた。

11月上旬は暖かで周期的に雨もあり, 中旬前半に冬の吹出しがあつて以後は気温が急低下し, 月平均は平年より0.5~1°C低い。中旬後半と下旬は晴天がよく続いた。故に全城とも平年よりかなり多照で南九州にそれが著しい。月始めに40~70mmの雨のあつた九州北半は平年雨量より多いが, その他は少雨である。

(7) 穏かな冬入り

前月に続いて12月上中旬は冷えたが下旬は暖かく, 西・南九州は平年より少照であつたがその他は多照, 月雨量は30~50mmで全城が平年より少なかつた。

総 括

2月は寒冷であつたが概して暖かい冬であり, 4月の異常高温と多雨少照が農業上は大きな問題であつた。初夏・梅雨は順調で6月末に出梅となり, 夏と初秋はかなり著しい高温であつた。中秋以後は周期的な暖冷晴雨の変化が多かつた。本年は久しぶりに台風が3回も来襲して, 九州の南・東部や島嶼の農業は甚大な被害を蒙つた。

